

● 基調講演 ● 東アジアの安定的発展と日本の役割

財団法人日本国際交流センター シニア・フェロー
東京大学公共政策大学院特任教授
元外務審議官

田中 均氏



日本にとっ
て東アジアは
死活的に重要
な地域であ
る。日本の将来は、世界の成
長センターである東アジアの
発展にかかっているといつて
も過言ではないが、極めて大
きなリスクを内包しているの
もこの地域の特徴だ。従って
リスクに対する十分な備えを
持ちつつ、問題を解決する仕
組みが不可欠となる。
そういう意味において、東
アジア共同体の考え方は正し
く、日米関係は決して2国

自由貿易地域つくりリスク低減

地域の信頼性を高め、発展
させていくことであり、これ
こそが日本の役割だ。と考え
る。その際、前提となるのが
安定的な日米関係である。私
自身は現在の中国が脅威だと
は思わないが、政策の予見可
能性は低い。中国との関係を
拡大している東南アジア諸国
の、有識者も同様の不安を口に
する。日米関係は決して2国

間だけの問題ではない。アジ
アの多くの国が日米安全保障
体制に期待を寄せていること
についても十分な考慮が必要
だ。東アジアにおける政策の原
則は、機会を増やし、リスク
を下げることであり、機会を
増やすためには、重層的かつ
機能に着目した枠組みの一つ
とマーケット
を守る全地域
的な仕組みが
ある建物。い
わゆる非伝統的安全保障のた
めの協力の枠組みである。
私は特定の支持政党を持た
ないが、政権交代は既得権益
に縛られず新しい政策を実
行する最大のチャンスだ。鳩
山内閣が東アジア共同体とい
う掛け声だけでなく、こうし
た制度設計のための戦略を練
り、政策を具体化していくこ
とを切に願う。

一橋大学
東アジア政策研究プロジェクト

成長の質を高め
政治・経済の
ガバナンスを改善



● プロジェクト説明 ● 「東アジア政策研究プロジェクト」とは



直面している問題の解決策を提言
一橋大学は、東アジアおよ
び日本が直面している構造的
諸問題を社会科学の様々な手
法で分析・抽出し、その解決
策を提言するため、2008
年夏に「東アジア政策研究ア
ラビ」を立ち上げた。
全体テーマは「東アジアの
安定的発展と日本の役割」・グ
ローバリゼーション・成長の
質・ガバナンス。社会科学の
総合大学である本学の強み
を生かし、高度な基礎研究に
基づく政策提言型の情報発信
を、全学的に行っていくこと
を目的としている。また、ア
ジアの有能な若手研究者を
様々な形で支援し、彼らと連
携を深めることも目的の一つ
である。
グローバル化によって急速
な変化を遂げているアジアに
おいて、国レベルにとどまら
ない重層的なガバナンスをど
のように構築し、成長の量で
はなく質をいかに高めるか。
歴史、経済発展、社会保障、
国際金融、国際政治、社会・
文化、企業マネジメントとい
った視点から5つのサプテ
ーマを設定し、その研究成果を
広く社会や政府に向けて発信
していく。

● パネルディスカッション ●

民主主義は社会発展の原動力
平和のための文化基盤を形成



一橋大学大学院
経済学研究科教授
谷口 晋吉氏



一橋大学大学院
社会学研究科教授
足羽與志子氏

加藤 まずはアジアの歴史の
総括から浮かび上がる課題につ
いて、それぞれの専門分野から
提起していただきたい。
谷口 アジアにおいて経済発
展が遅れたのはなぜかを問
いて、その後の専門分野から
提起していただきたい。
谷口 アジアにおいて経済発
展が遅れたのはなぜかを問
いて、その後の専門分野から
提起していただきたい。

介入には限界があること。2つ
目は、政府と反政府の対立の場
合、国家間関係では現政府対応
が原則であるため、反政府集団
との直接交渉や支援ができない
こと。3つ目は、外部介入を拒
否する国は他国の国内紛争や人
権問題への介入には慎重になる
こと。4つ目は、人権や言論の
自由、民主主義、宗教の自由を
基準とした批判が、西欧的概念
の強要と受け取られる可能性が
高いことだ。そうすると反欧米
のナショナリズムを刺激し、国
内の活動家が発言しつづける状
況を生んでしまう。
昨年10月にはアジア初のA
S
EAN政府間人権委員会ができ
たが、人権侵害に対して調査や
提言をしないことなどから、欧
米諸国からはあまいでわかり
にくいとの批判もある。
私は、紛争解決にはこうした
政治的解決のほかに、文化的解
決方法があるのではないかと考
える。特に、侵略戦争という負
の遺産と、戦後の平和国家建設
という正の遺産を持つ日本は、
もっと積極的な平和思想を構想
し、平和構築や和解への独自の
取り組みを推進していく必要が
ある。そのためには、日中、日
韓の歴史共同研究のような学術
交流や「文化混流」、芸術や宗教
政治、経済といった多様なセク
メントの連動を進め、平和のた
めの文化基盤形成のイニシアチ
ブをとることが日本に課せられ
た役割ではないかと考える。
コン 近現代の東アジア国際
秩序の特徴を一言でいえば、国

相手の主張を知って相互理解
歴史に問い続け現在に生かす



一橋大学大学院
社会学研究科教授
糟谷 憲一氏



一橋大学大学院
法学研究科准教授
コン・ヨンソク氏

加藤 歴史認識の共有という
問題についてはどうとらえる
か。
糟谷 一橋大学とソウル大学
の歴史共同研究では、違うこ
ろは違うと認識したほうがいい
と考える。その背景を2つの視点
から考えてみたい。
1つは「日本が朝鮮を植民地
化したのは必然だったのか」に
ついてである。19世紀後半まで
続いた東アジアの国際秩序にお
いて、朝鮮は中国の藩属国であ
り、外交の際には臣下の礼をと
らう。

コン 重要なことは観点を国
家、権力、資本、文明、拡大、
男性側に置くか、それを相対化
できるかだ。「近代」を総括す
る過程でトランスナショナルな
歴史認識の共有が可能だ。歴史
問題は重たいが、この問題が提
起された80年代以降、この地域
では戦争の可能性が低くなって
いるというの事実。歴史を問
うことで、過去の過ちは二度と
繰り返さないというコンセンサ
スが、この地域で生まれている
のはとても意味がある。歴史問

糟谷 西洋に追随し、朝鮮
を犠牲にして日本の近代化を
進めたのは、当時としても間
違った考え方であつたと思
う。西洋中心ではない対等の
秩序をつくる選択肢もあつた
はずだ。
コン 当時の日本はアジア
主義を掲げた。アジアと連帯
し独立を確保するといった理
念があつたはずだが、韓国併
合によつてその理念を自ら損
ねてしまったのではないかと
加藤 最後に、東アジアは
宗教が多岐ゆえに、東アジア
共同体は難しいといった見方
もある。足羽 キリスト教が欧州全
体を覆う文化や価値観に染み
こんでいるように、多宗教で
あることがアジアの長い歴史
に染みこんでいる。多宗教
だから不安定なのではなく、
その歴史をアジアの豊かさ
として肯定的にとらえることは
十分に可能だ。



主催：一橋大学国際共同研究センター <http://www.ijrc.hit-u.ac.jp/>

お問い合わせ先：東アジア政策研究プロジェクト室 TEL 042-580-8765

広
告